

VBI BENE IBI PATRIA

南 ヨーロッパ

ことばと文化の旅 藤松忠夫 著

SSD SANSEIDO



南 ヨーロッパ

ことばと文化の旅

藤松忠夫 著

三省堂

はじめに

一九六四年に海外観光旅行が自由化されたころ、年間二十万人足らずだった日本人海外旅行者の数は、今日二百万人をこえるに到り、なお非常な勢いで伸びつつけている。

しかし、こうした海外旅行者が、十分に満足のいく海外旅行をしているかという点、必ずしもそうではないようだ。

なかには、三台のカメラをあやつって、ひまさえあればシャッターを切りつづけてきたが、あまり忙しくて何を見たんだか、どこに行ったんだか、さっぱり記憶にない——という笑えぬ話もある。友人知人に頼まれた山のような買物を消化するだけでヘトヘトになり、自分のおみやげはどうとう何ひとつ買わずに帰ってきた奥さんもある。旅の途中でお腹を悪くして何も食べられなかった人も少なくないし、不眠症になって、昼間はバスの中で寝てばかりいた——というお年寄りもある。

私自身今月はじめにロンドンでひどい失敗をやった。

朝七時半にロンドンを出発し、パリに行く日航機に乗るというので、前の晩夜中まで友人と飲み、ホテルに帰ったときフロントに五時半のモーニング・コールと六時ホテル発のハイヤーを空港までのんだ。ハイヤーは五ポンド五十と高いがまあ遅れるよりはいい、とフンバツすることにしたのである。

さて、眠い目をこすりながら起こされ、ようやく車に飛びのり、まだ暗い中をヒースロー空港にかけつけた。ハイヤーの運ちゃんには六ポンドやって「サンキュー・ベリーマツチ・サー」といわれ、気分よくカウンターの前までくると、セキュリティ・チェックをやっている。

トランクを台の上にのせ、いざ開けようとしたら、トランクの鍵がない。

寝ぼけてホテルの部屋を出るときに、ベッドの上にのせたまゝポケットに入れるのを忘れてきたのである。やれやれ弱った、こうなったら鍵をこわすか……と思っていると、カウンターの係員が「この便は遅れて九時二十分発です」という。

それからタクシーを呼んでホテルに引き返し、そのまゝ車を待たせておいて空港へ……これで往復七ポンドいくら、それにチップを入れて八ポンドとられた。一ポンドは六百四十五円だから、ハイヤー代まで入れて何と九千三十円も払ったことになる。

このケース、第一のミスは飛行機の出発時刻をリコンファーム（再確認）しなかったことによる。とくに日本から来る長距離の国際線をロンドンでつかまえようとするときは、まず遅れることは覚悟しなければならぬ。たまたま、その前の便に乗って遅れなかったので油断をしたのがいけなかった。

第二はカバンの鍵である。これほどなくしやすいものもないから、必ず二つのカギを持つようにして、ひとつはポケットにキーチェーンにつけて入れ、ひとつははずしてセロテープでパスポートの裏表紙のところにペタリ貼りつけておくように、いつも旅行案内に書いておきながら、自分で実行しなかつたためにバチが当たつたのである。

こうした、ちよつとしたミスが、旅行全体をまことに不愉快なものにすることはいうまでもない。

やれやれ、九千円もあれば上等のネクタイが買えたのに……などと悔めば、いよいよ腹が立つ。

自からの恥をさらすようだが、やはり海外旅行に行く場合には、こうした最低の「ノウハウ」があつた方がいい——という貴重な体験であつた。同様のことは、レストランに行つても、ホテルに入つても、飛行機に乗るような場合でも、買物をするようなときもいえることで、ちよつと注意しておいてもらえば、ずいぶん助かつたのに——ということは少なくない。

本書はこうした主旨から、何回かの欧州旅行の経験に、日航関係の知人たちがいろいろアドバイスしてくれる体験談なども参考にしてまとめたもので、南ヨーロッパ旅行の「ノウハウ」とでもいふべきものである。

旅行案内書はいろいろあるが、いわゆる「××教会は聖××の創立による」とか「××の像は誰々が彫つた」とかの大部分はツアーのコースに組みこまれており、ガイドが説明してくれるので、いちいち読む必要がないように思われる。また、旅を終えてみて、心の中に焼きついていた映像は、意外にも有名な建物や名所ではなく、道を尋ねたコーヒースタンドの女の子の、まっ青な眼の色であつたり、下手

な英語で日本のことを話し合った観光バスの運チャンの顔であったりする。

人間が十人十色なのと同様に、旅も十人十色、それぞれの人間がそれぞれの楽しみを考え、創り出すものであるはずだ。

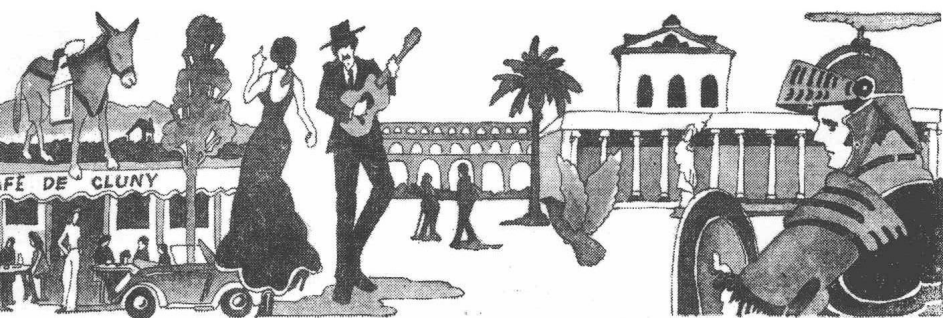
本書は現代に息づいている南ヨーロッパを『旅』というスタイルを通して捉えようとしたものである。

昨年暮の石油危機以来、「不要不急の海外旅行はひかえるように」などと意見も出されている。貴重な外貨やエネルギー資源をつかってする海外旅行者が「日本の恥」になるような行動をすることが、批判の対象にもなっている。どうせ海外に出かけるなら、少しでも有意義な旅であってほしい。よく目を開き耳を開いて旅行をしていけば、必ず今後の人生にとってプラスになる貴重な『何ものか』を得ることができる、私は確信している。

そのために、本書が多少とも役立てば望外の幸せである。本書の執筆に当ってアドバイスを戴いた山下、松下両氏、編さんにあたりご協力を戴いた三省堂の白井氏、並びに安江氏に紙上をお借りし感謝したい。

一九七四年三月

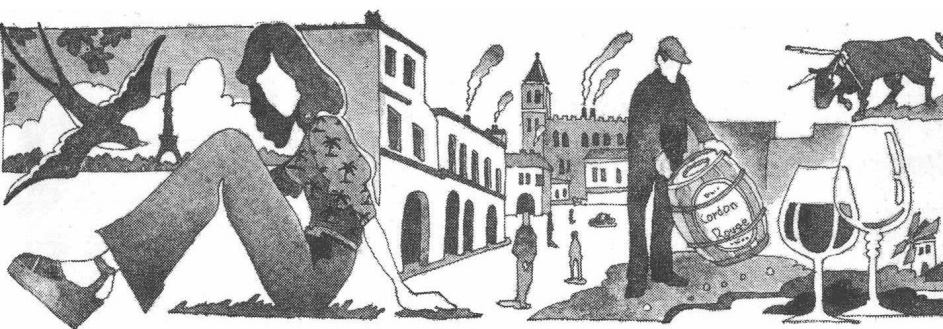
藤 松 忠 夫



もくじ

パ リI

パリに着く	3
タクシーとリムジン	9
ホテルについたら	14
食事に行く	19
朝の散歩	25
パリの地下鉄	29
サイト・シーイング	32
買物	39
パリのお巡さんは粹だというが	42
パリの夜	45
南仏の旅	49



ローマ.....65

レオナルド・ダ・ビンチ空港にて 65

ローマの宿あれこれ 70

お腹を空かしてチャレンジしよう 74

長い長いローマの夜 77

国際色豊かな観光バスに乗って 81

買いたいものは山程あるが..... 85

スペイン.....99

運チャンは英語がダメだが..... 99

宮殿や修道院にも泊れる 102

ハイヒールも飛ぶ闘牛場 105

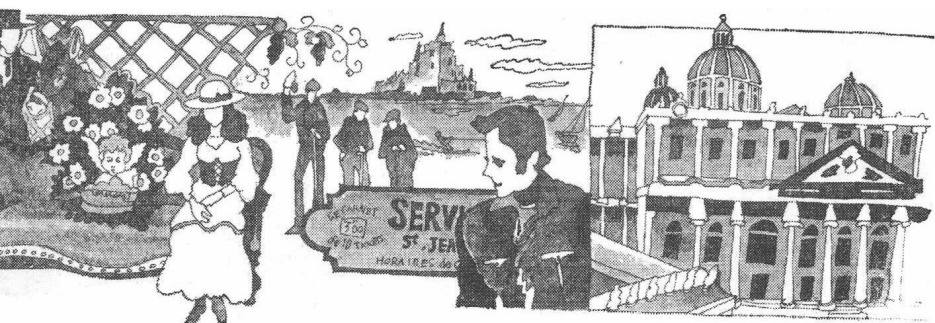
油っこく強烈な味のスペイン料理 109

夜のきわめつきはフラメンコ 112

すばらしいグラナダ織りの色彩 117

ポルトガル.....129

ポルトガルへの旅..... 129



旅に出る前に……

135

飛行機旅行のコツ

137

二十数万円台のヨーロッパ旅行

145

服装のTPO

56

洋酒のTPO

59

手荷物あれこれ

90

電話をかける

94

楽しい旅はまず健康から

120

忍耐を要するトイレ探し

123

五か国語会話……

I
(236)

数 2

出入国の際に

6

銀行にて

10

タクシー・リムジン

10

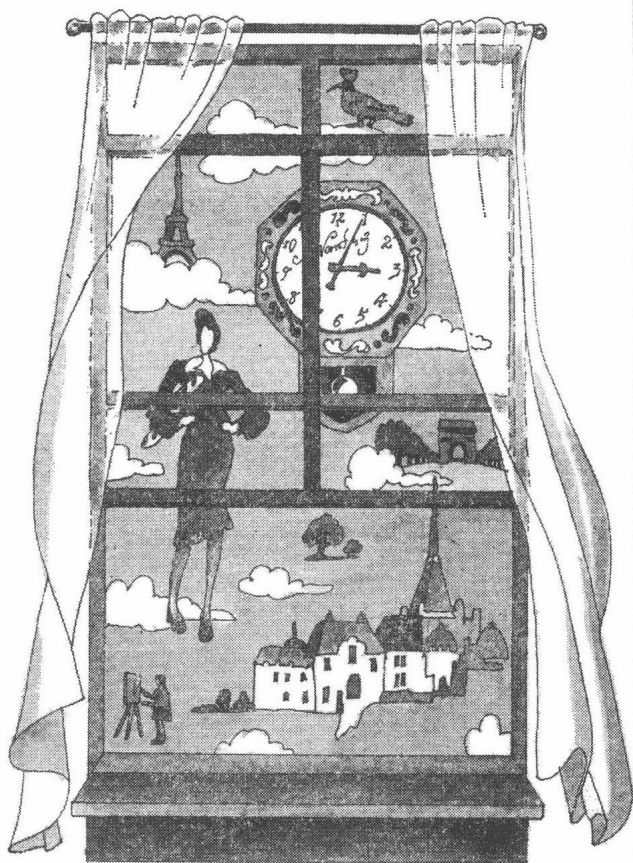
ホテルにて

12



電話をかける	16
道を尋ねる	18
レストランにて	20
郵便局にて	24
旅行をする	26
買物	28
プレイガイド	32
病気の時	34
一般会話	34
南欧パッケージ旅行	39
ガイド	47
ホテル	49
レストラン	59
買物	72
ナイト・スポット	78
	(192)
	(200)

パ リ



パリに着く

「皆様、当機はまもなく、パリ・オルリー空港に到着いたします。」

映画やポスターで見たり本で読んだパリの、さまざまな映像が目の前をよぎる。それらがもうすぐ現実となって、自分の前に現われるのだ。

北廻りコースをとつても、あるいは南廻りでも、モスクワ経由でも、パリに到着する日本人旅行者はみな一様に、世界の都パリを目前にして、不思議な胸さわぎを覚える。それはパリという都会のもつ、魔性のせいかもしれない。

こんな旅行者の心のときめきを知ってか知らずか、オルリーのターミナルは到着と同時に、その小粋な姿で旅行者の目を見はらせる。

何しろビルの外觀があつというほどすばらしい。ビルは濃い緑色を基調とし、窓のブラインドが鮮かな黄色で、しかもアットランダムにブラインドが上がつたり下がったりして、これがまた全体にアブストラクトなおもしろさをだしていて、『サスガ!』と舌を巻く。

こうしたカラー・スキームの良さは、道路工事のサインにまで現われており、パリの市役所には画家

くずれかなんぞで、よほど色彩感覚のすぐれた人が勤めているのではないかと思わせる。

バスでターミナルビル脇に着くか、またはジェットウェイを通って建物に入る。入ると、手荷物をのせる手押し車（日本のスーパー・マーケットによくあるような車）が方々にあるから、これに手荷物をのっけて長い廊下を押していけばいい。重い手荷物を三つも四つもブラ下げて歩くのは何ごとによろず見かけのいいものではない。

廊下を歩き出して、またまたフランスのセンスに心をうばわれる。廊下の両側に張ってあるポスターが、それはたとえ音楽会のポスターであれ、貿易見本市のポスターであれ、どれ一枚を持ってきたてもシャレた部屋の飾りになるようなものばかりときている。

“アタンシオン・シル・ブ・プレ……”

スピーカーから流暢なフランス語のアナウンスが流れてくる。少し鼻にかかった独特の響きと、やわらかなアクセントのフランス語は、快よい音楽となって耳にとびこんでくる。アダモやアズナブールの



歌の中に語り調のものがあるが、語り自体が一つのメロディーになっていて、リズムが特につかなくとも切々とした情趣を伝えてくるものだ。これもフランス語自体のもつ美しさの効果であろう。

ちよとやっかいなオルリー空港

やがて、パスポート・コントロール（出入国管理）のブース（箱型のカウンター）にやってくるから、ここでパスポートを見せて通る。

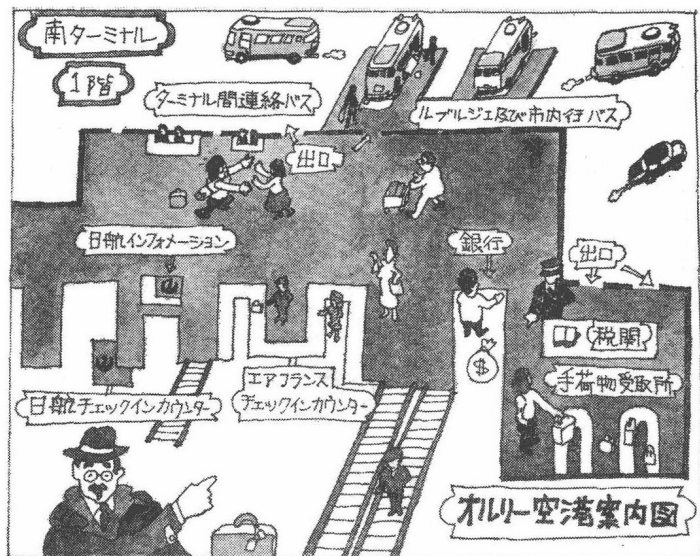
さて、ここからがほかの空港とちがって、オルリー空港はいささかやっかいな空港なのである。

やっかいというのは、バゲジ・エリア *Baggage Area*（手荷物受取所）がすぐそばに続いていること、旅客はすべて中央のエスカレーターでまず一階に降りなければならぬ。そこから右に行き、つきあたりの右手の部屋に入って手荷物受取所でチェックド・バゲジ（預託手荷物）を受け取り、税関検査を受けて外に出る。

この間の部分——つまりエスカレーターを下りてから、バゲジ・エリアに入る間の部分は法律上はフランス国内ということになっており、いわゆる保税地域ではない。

ここにも手荷物をのせる車があるから、これをサツと掴まえて（早くつかまえないと人にとられてしまう）、それから手荷物がベルトで流れてくるカウンターに行くことである。

そうでない、ここにポーターがいて、一個につき一フラン位はチップを払わなければならないから、折角車があるのに、こんなお金を払うのはバカバカしい話だ。



ヨーロッパはどこでもそうだが、税関はほとんど問題ない。特にスーツ・ケースの類は開いてみるなどということはない。

ただし、ビジネス旅行者が、サンプルなどを段ボールにつめて持っていると、ひっかかる恐れがある。こうしたもので、税関の対象になりそうなものは、なるべくスーツケース（最近アルミ合金製のスーツケースで軽くて便利なのが販売されている）に入れておくとよい。

ジャーナリストやカメラマンなどで、フィルム（特にシネ・フィルム）を大量に持ち込む場合は、いささかやかいだ。というのは、一度に持ち込んだものを確実に持ち出すことを保証するため、ボンド（供託金）をつまなければならないからだ。ひどい場合は、三千フラン（十八万円）近いボンドをとられ、ヒイヒイ言うことになる。

あとうるさいのは酒・タバコだが、酒は日本と

ちがい一本（日本は三本）だけ無税、タバコは一カートン（二百本）だから注意のこと。

両替はスマートに

こうして無事に税関を通ったら、もう一度中央に近いところにある銀行（フランス語もバンクである）にもどって、お金を交換する（シャンジェ）ことである。

空港を出れば必ずお金がいるし、チップも必要になるから、米ドルでとりあえず三十ドル程度（あとはもっとレートがいいところかえる）をフランにし、その際にチップ用の小銭（プティット・モネ *petite monnaie*）をもらうこと。

ヨーロッパ旅行の際、気をつけなければならないのは、お金をかえる（両替）のをスマートにやることで、これをうまくやらないと大損してしまう。常に換算レートに注意して、しかも各々の国で必要最少限の額をかえるように心がけることだ。

一度にたくさん額の額を一国の通貨にかえてあまった場合、元にもどすのが面倒だし、かならず何パーセントかの手数料をとられるのでそれだけ損をしてしまう。

また、最近のように通貨の変動が激しいと、ヨーロッパを旅行するときに、どの通貨を持って行くのが一番よいかという事が問題になる。日本人旅行者は大体米ドルを持って行くが、必ずしも米ドルが歓迎されるとは限らない。日本をでる前に銀行とよく相談して、その時点で最も強い通貨を持っていくのがよい。たとえば、ポンドのトラベラーズチェックとか、マルクあるいはスイスフランなど一番よいも